

## 若き日の森田思軒

——矢野龍溪との交流を中心に——

川戸 道昭

ジュール・ヴェルヌの『十五少年』の翻訳者として今日なお名前を知られる森田思軒、その思軒が翻訳文学者として世に立つまでの過程で、最も大きな転機となった出来事はなにか。いま仮に、それを一つあげよといわれれば、わたしはためらうことなく矢野龍溪との出会いと答えるだろう。もし矢野との出会いがなかったら、今日われわれが目にするような思軒は決してこの世に存在しなかった。そう断言しても誇張にはならないほど、矢野という人物は森田思軒の精神形成に、あるいは翻訳文学者としての伎倆の向上に大きな影響を与えている。

そもそも二人の出会いは思軒が大阪の慶應義塾に入学する明治七年当時にまで遡る。<sup>①</sup>この最初の出会いから、思軒が三十六歳の若さで没する明治三十年十一月にいたるまで、矢野は陰に陽に思軒を支えた。ただ支えたばかりではない。ときには、先輩作家としての立場から、厳しい注文をつけることもあった。たとえば、思軒が、漢文に通じた第一級の教養人から『郵便報知新聞』の小説欄に筆を執る大衆作家に身を転ずる際に矢野の与えた注文は、漢字使用を制限し、「男子のみならず婦女子迄も容易に読み得る」<sup>②</sup>文章を作成せよということであった。この注文に答えるために思軒が重ねた試行錯誤、換言すると、文学者として世に立つために必要なそうした産みの苦しみがなかったならば、思軒は永遠に旧文学を代表する教養人・文章家にとどまった可能性が高い。本稿は、そのような旧文学の素養を身につけた思軒が、矢野との交わりを通して次第に西洋文学の名翻訳家へと転身してゆく様子を、単に作家としての側面ばかりか、人間としての側面にも焦点をあてながら詳しくたどってみようというものである。いってみれば、思軒の少年期から青年期にかけての心の軌跡を検証してみようというのがその目的である。表題を「若き日の森田思軒」としたゆえんである。

## 一 出会い

思軒・森田文蔵は、文久元（一八六一）年七月、備中小田郡笠岡村（現笠岡市）に商家の長男として生まれた。明治五年に小学校に相当する啓蒙所に入学し、そこで二年間学んだ後、明治七年五月、十三歳で、大阪の慶應義塾に入学する。父親の佐平が笠岡村の戸長を勤めていた関係から、当時小田県権令であった矢野光儀（みのり）と相知り、その子息文雄が教授をしていた慶應義塾に入学したのだといわれる。思軒にとって、この慶應義塾への入学と、そこに分校長として赴任してきた矢野龍溪との出会いは、その後の人生を大きく変える少年期最大の出来事であった。この最初の出会い以降、同校を退学するまで、思軒は、矢野を常に変わらぬ師と仰ぎ、彼の行く所、行く所、まるで母を慕う子供のようについていった。大阪の慶應義塾は、学生数の伸び悩みなどから、明治八年六月に閉校され、翌月、阿波の徳島に移転するが、思軒も矢野にしたがって徳島にわたる。さらに、明治九年春、龍溪が郵便報知社に招かれ帰京すると、思軒も師を慕って上京、彼を保証人に東京の慶應義塾に入学するのである。

この間の矢野に対する敬慕の気持ちを伝える資料の一つに、思軒自身が所蔵していた徳島慶應義塾時代の塾生・教員の集合写真がある。この写真は、徳島慶應義塾の教員と塾生の姿をとらえた唯一の証拠写真として、慶應義塾史にも掲載されているものだが、それを見ると写真中央の矢野を囲むかたちで二十数名の塾生の姿が写されている。そのなかに、ひとときわ若い、いまだ少年の面影をとどめた思軒の姿がみえる。このとき思軒はいまだ十四歳、阿波慶應義塾中の最下級の生徒であった。そんなこともあつてか、師のすぐ斜めうしろに立っている思軒の顔には、こころなしか不安そうな表情がのぞく。しかし、その心のうちは、意外にも、晴れ晴れとした喜びにみちっていた。そのことは、彼自身が、写真裏面の台紙に書き込んだ次のような添え書きからも推測できる。

《明治丙子之春、阿州徳島慶應義塾教員矢野氏、教授ノ任滿テ瓜期已ニ近ニアリ、故ニ同塾ノ生員挙テ先醒ニ足勞ヲ願ヒ真影ヲ写シ以テ親意ヲ表サント乞フ。先醒亦直ニ之ヲ許諾セリ。於是生員二十余名先醒ニ陪從シ欣然写之。余モ亦欣然中ノ一人ニテ、時三月十二日也》

《阿波徳島慶應義塾分校時代／中央ニアルハ教授矢野文雄氏（長髪有髻ノ士）／左隣ニアルハ思軒森田文蔵也（十六歳）》<sup>3)</sup>

いかにも、龍溪を敬愛してやまない思軒の気持ちが行間にはじむ好文章だと思いが、これを読んで、身近に迫った別離の悲しみが一向に伝わってこないのは一体どういうことか。それは、おそらく、この時すでに思軒は、矢野に従って東京へ赴くことに決めていたためではないだろうか。ここに記された日付からわずか十二日後の三月二十四日には、父佐平から東京の思軒に宛てた手紙が残されているところを見ると、どうもそう解釈するのが妥当なように思われる。<sup>4)</sup>もし、そうであれば、これを写した思軒の心に存在したのは、単に、敬愛する師と写真を写せるという喜びばかりか、その師について上京し、東京の慶應義塾本校で学べるという大きな期待であったということになる。最後の「余モ亦欣然中ノ一人ニテ」という言葉には、どうもそうした包み隠しのない少年思軒の喜びと希望が投影されているように思われる。

一方、矢野の方はどうだったのか。前途有為の学生の指導をあずかる教師の立場から見て、思軒は一体どのような少年と映っていたのか。その心の内を推し量るための資料として、矢野と入れ替わりに徳島慶應義塾の校長に就任した城泉太郎の日記に、次のような注目すべき記述がみられる。

《森田文蔵君は、森田思軒と号し、文人社会に名があつたが、同人は、阿波慶應義塾分校の最下級の少年生徒であつた。それを矢野氏は何処か同人に見込があつたと見え、大に同人を寵愛し、徳島を去るに臨み同人を供につれて帰京したが、果して矢野氏之眼力通り東京で文名をあげた。》<sup>5)</sup>

この城の日記の伝えることが事実とそう大きく異なるものでなかったことは、このとき思軒とともに徳島の慶應義塾分校から転校したと思われる他の二人の塾生の記録を参照することによって判然とする。慶應義塾の『入社帳』<sup>6)</sup>によれば、彼らの名は、古賀静吉、渡辺源次郎といった、古賀は「阿波」、渡辺は「大阪」の入塾となっている。転校の時期は、思軒と同じ「明治九年四月二十五日」で、「証

人」欄はいずれも「矢野文雄」とあるから、思軒とともに徳島の分校から転校した塾生であったことは間違いない。年齢を見ると、思軒が「十四年八月」であるのに対し、古賀と渡辺は、それぞれ「十八年二月」、「十八年三月」とあり、思軒よりも三、四年も年長であることがわかる。それでいて、二人が編入された等級は、古賀は思軒と同じ「本科第二等」（最上級の次のクラス）、渡辺はそれより数等級下の「予備大人科」というように、最年少の思軒が四歳年長の生徒と同じ、ないしはそれよりも上になるという逆転現象がみられる。矢野はそんな思軒をどこか「見込み」あるものとして、「寵愛」したのである。

ただし、城の伝える最後の一文、すなわち「徳島を去るに臨み同人を供につれて帰京したが、果して矢野氏の眼力通り東京で文名をあげた」というのは、いささか短絡的にすぎるだろう。矢野が思軒を「つれて帰京した」とこと、思軒が「東京で文名をあげた」とことの間には、十年もの歳月の開きがみられる。その十年間というのは、思軒にとつて、おのれの性向を見極め、その見極めた性向の上に立つて将来の方向を翻訳家・ジャーナリストと定めていく、文字通り、自己のアイデンティティーを確立するための十年間であった。その十年間こそが、翻訳家思軒の誕生に欠かせない十年間であったとすれば、われわれはその間に思軒の心に去来したさまざまな思いや精神的葛藤を詳しく分析してみる必要があるだろう。

## 二 思軒の成績

明治九年四月、思軒は、東京三田の慶應義塾に転校し「本科第二等」に編入される。福澤諭吉を初めとする名だたる知識人の指導下におかれることになった思軒の学業ぶりが一体どのようなものであったのか、残念ながらそれを伝える詳しい資料は残されていない。わずかに、彼が在学した当時の成績表（「学業勤惰表」）が二通、慶應義塾に残されている程度である。慶應義塾福澤研究センターの協力をえてその写しを入れることができたので、それをもとに当時の思軒の学業ぶりや交友関係を推し量ってみることにしよう。

その成績表というのは、一通は、思軒が転校した翌日の明治九年四月二十六日から七月二十七日までの三ヶ月間と、それから半年ほどを隔てた、明治十年一月十日より四月十三日までの三ヶ月間のものである。要するに、思軒が東京の慶應義塾に在籍したほぼ一ヶ年うちの最初と最後の三ヶ月間の成績表である。それは、かつて柳田泉によって紹介されたものではあるが、すべてを伝えるには至つ

ていないので再度ここに紹介してみることにする。

《明治九年四月二十六日より七月二十七日まで（本科第二等）

出席割合 九六 算術割合 八〇 小試業割合 八七 大試業割合 七四》

《明治十年一月十日より四月十三日まで（本科第一等）

出席割合 四一 算術割合 八一・七 小試業割合 四〇 大試業割合 六九》

表の見方を簡単に説明しておく、「小試業」とは毎月行われる試験のことを、「大試業」とは期末に行われる試験のことをいい、成績は出席を含めてすべて百分率で計算されている。最初の「出席割合」を除外した「算術」「小試業」「大試業」の割合を総計して一番数字の高い者から順番に在籍者の氏名と得点を掲載したのがこの「学業勤惰表」である。思軒の席順は、本科第二等のクラスにおいては二十七人中十七番、本科第一等のクラスにおいては、十六人中七番となっている。科目ごとにとみると、算術の成績が意外によく、本科第一等では十六人中四番の成績である。

問題はこの二つの成績表からなにが読みとれるかということだが、最初と最後の成績で極端に差があるのは、出席と小試業の割合である。本科第一等に在籍した際の出席率は本科第二等のときと比べて、半分以下の四一パーセントとかなり低い。毎月の試験もおそらく未受験の月があったのだろう、四〇パーセントとそれに見合ったものとなっている。この出席率低下と、思軒が本学期を最後に慶應義塾を退学しなければならなかったということの間には何か密接な関連があるように思われるが、果たしてそれがいかなることに起因するのかはまったく不明というほかはない。ただ、はっきりしているのは、最後の「大試業」を受験していることや、そこに森田文蔵の名前が掲載されていることからみて、少なくとも四月十三日までは思軒は同校に在籍していたということである。その次の五月一日からの勤惰表には、このとき大試業を受験しなかった四名とともに思軒の名前は消え、残りの十一名の名前のみが記載されている。大試業

を受験しながら思軒の名前のみが消えているというのは、思軒のほうから自主的に退学したというようにも受け取れるが、確かなことは何もわからない。

### 三 三田の同胞たち

もう一つ、この勤惰表から読みとることができるのは、思軒とともに学業に従事した同窓生の名前である。たとえば、思軒が「本科第一等」に在籍したときの表で見ると、「本科第四等ノ一」のクラスには、赤坂亀次郎の名前がみえる。同じく「第五等ノ一」のクラスには、加藤政之助と犬養毅の名前が、「童子科」のクラスには、井上寛一と矢野貞雄の名前がみえる。思軒を含めてこれら六人の人物は、のちに翻訳文壇や政界に確固たる地歩を築いた著名な人物で、当時の慶應義塾がいに多くの俊秀を輩出する学校であったかを証明する貴重な資料ということができよう。

しかし、後世に名を残した人物というだけならば、この六人以外にもあげなくてはならない人物はいる。わたしが、ここに六名の名前を掲げたのは、そういうことではなくて、これら六名が一人を除いてすべて、矢野の率いる『郵便報知新聞』の論客としてならした人達であったためである。しかも、その多くは、明治十九年に同紙に新設された「嘉坡通信／報知叢談」（以下「報知叢談」と記載）という小説欄に関係する人々であった。明治十九年九月十九日付の『郵便報知新聞』に掲載された「広告」<sup>④</sup>によれば、同欄に執筆を予定していたのは、「藤田鳴鶴、箕浦青州（勝人）、加藤城陽（政之助）、枝元□岳（長辰）、矢野三峽（貞雄）、井上孤山（寛一）、森田思軒、尾崎学堂、矢野龍溪」の九名であった。これらの人物の作品が実際に「報知叢談」欄に発表されたかどうかは不明だが、森田文蔵、加藤政之助、矢野（のち小栗に改姓）貞雄、井上寛一と、明治前半の翻訳ブームを支えた人物の名前がこのたった一枚の「学業勤惰表」のなかに見いだされるということは、慶應義塾が従来いわれてきたように文学とは無縁の学校であったということに対する有力な反証となりうるものだろう。

一人、赤坂亀次郎のみそこには名前がみえないが、実は、この赤坂という人物は、明治前半の翻訳文学ブームを蔭で支えた立役者ともいえる人物であった。彼は、明治二十年春、小野梓の東洋館が小野の死後倒産しかけたのを引き継いで、それを集成社と改名し、自

らその社長に就任する。赤坂(10)がそこで行ったことで最も注目されるのは、西洋著名文学作品の翻訳を次々に世に送りだしていったことである。たとえば、集成社から出版された翻訳文学作品の一端をあげると、グリム著・菅了法訳『古事 神仙叢話』(明治二十年四月)、シエイクスピア著・渡辺治訳『鏡花水月』(同二十一年五月)、リットン著・吉田熹六訳『奸雄の末路』(同二十一年五月)等、明治前半の翻訳文学作品中的重要な位置を占める作品がならぶ。思軒もこの集成社とは大変関係が深く、翻訳者としての思軒の名が初めて世間に知られるきっかけとなった「はな 仏、曼二学士の譚」(「報知叢談」欄に掲載)が、『鉄世界』(同二十年九月)と改題されて発行されたときの出版社は、ほかでもないこの赤坂率いる集成社であった。

興味深いのは、同出版社から翻訳書を出版した人々の大半が、思軒と同じ明治十年前後に慶應義塾に学んだ人々であったということである。たとえば、最初に掲げた日本で最初のグリム童話の翻訳書を手がけた菅了法は、思軒と入れ違いの明治十年六月の入学。次の、シエイクスピアの『間違いの喜劇』を翻訳した渡辺治は、明治十四年九月の入学。そして、最後の、リットンの『カルデロン』の翻訳を残した吉田熹六は、入学の時期こそつまびらかにしないが、思軒とは同窓にして、ともに矢野の新聞刷新運動を支えた人物である。一般の文学史などではあまり取りあげられることはなかったが、これほど多くの翻訳文学者が同じ時期のたった一つの学校に顔を揃えていたということは、明治翻訳文学史上の特筆事項といってもいいものだろう。

#### 四 慶應義塾で学んだこと

このように、思軒が在籍した当時の慶應義塾には、明治十九年以降の翻訳文学ブームをささえる数多くの人物が存在した。なにか、よほど特別な文学関係の講義でもなされていたのかと、当時慶應義塾で使用されていた教科書を調べてみたが、特に文学らしき書物はみあたらない。思軒の在籍した、本科第二等では、「チトレル万国史、エエランド経済書、エエランド修身論、ロビンソン代教初歩、ロビンソン高等数学」、同じく第一等では、「ギイゾウ文明史、エエランド『メタヒジックス』、エエランド修身論、ロビンソン高等数学」というように、その頃一般の私塾などで用いられた教科書とあまり変わりばえがしなかった。わたしの手もとには、たまたま、その両方のクラスで用いられた「エエランド修身論」(Elements of Moral Science) という書物が架蔵されていて、中表紙に「慶應義塾之印」と記

された朱印が押され、「第拾四号」という墨の書き入れがあるところから、おそらく、その同校で用いられていた教科書の一冊であったと推測される。それをみると、「道徳律」や、「財産権」、「親の権利と義務」、「アメリカ合衆国の政府の形態」といった多岐にわたる問題が、現在の大学教養課程程度の英語で説明されている。要するに、西洋人の道徳観やそれに基づく社会の仕組みが、比較的平易な英語で論じられた教科書ということになる。

その程度の教育内容で、どうして後の翻訳ブームを支える重要人物たちの養成が可能であったのか。当然そういう疑問も生じるが、それは、あくまでも現在の学問環境に身をおかれわれ現代人の視点に立った疑問である。当時の人々は、学問というものを今のようには細分化して捉えてはいなかった。政治も経済も文学もそれぞれが密接につながりあった、もつとトータルなものと受けとめていた。同じ西洋のことを学ぶにしても、政治、経済、文学等の個別の専門分野をきわめるよりは、そうした学問領域に共通する原理原則を学ぶということができるようになり大きな力点がおかれていた。それさえしつかり習得しておけば、個々の学問は必要に応じて独自に身につけていくことができるというのが彼らの基本的な考え方であった。現在の大学のように、西洋の詩歌や小説がとくに教授されていたわけではないのに、後に翻訳文学界で活躍する人物が多数輩出したというのは、その辺に原因の一端があったとみなければならぬだろう。

それともう一つ、見逃すことができないのは、当時の慶應義塾の師弟間に広く行き渡っていたパイオニア精神、ないしは進取の気象である。それは建学者の福澤諭吉が、明治四年に、校名を慶應義塾と定める際にしたためた宣言文中に象徴的に表れている。そこで使われている「自我作古（我より古をなす）」という言葉は、高村象平氏（一九六〇年塾長就任）によれば、「未開拓の領域に進み入り、先鞭をきって実行した作業を、後身者にとつての先例たらしめるの意である」という。矢野の呼びかけ一つで、同塾の出身者が集まって未開拓の翻訳文学の世界に乗りだしていったというのも、初期の慶應義塾の教師と学生の間にも広く共有されていたそうした精神があったからこそなのである。矢野龍溪、藤田鳴鶴、森田思軒、矢野貞雄、井上寛一、菅了法、渡辺治、黒岩涙香、赤坂亀次郎と、いずれをみても「未開拓の領域」に分け入って、「先鞭をきって実行した作業を、後身者にとつての先例たらしめ」た人ばかりである。グリムやペローなどの西洋児童文学の紹介、ボアゴベヤガボリオなどの探偵小説の紹介、ユゴーに代表されるフランス人道主義小説の紹介、シェイクスピアの原文にもとづく口語訳の試み等々、矢野の呼びかけを契機に、これらの人々が翻訳文壇上に試みた様々な先駆的試み



は、まさに建学者福澤が提唱する「自我作古」の精神の結実以外のなにものでもないといえるだろう。

一つには新しい西洋の学問にとり組むための基礎学力、そして一つには「未開拓の領域」に分けいらんとするバイオニア精神、それが当時の慶應義塾で学んだものが手にすることができた最大の収穫であり、思軒も、のちに翻訳文学者として世に立つようになってから、その恩恵に十分浴することになる。そして、さらには矢野龍溪という二人と得難い先達、加えて同じ精神・気象を共有する同窓の士、それもまた、時がたつにつれ、思軒にとってはかけがいのない宝となっていくものであった。要するに、翻訳者思軒の存在を可能ならしめる数多くの要因を、この慶應義塾で学んだ三年間に、思軒は手にいれることになったのである。

## 五 再出発

学業勤惰表の上では、明治十年四月十三日を最後に、思軒は慶應義塾を退学する。ときに思軒十五歳。考えてみれば、この若さで、慶應義塾の「本科第一等」まで登りつめたというのはきわめて異例なことである。同じ勤惰表に名前の載っている同窓生たちと比較しても、三級下の「本科第四等ノ一」に在籍した赤坂亀次郎は、安政五（一八五七）年五月生まれの十八歳、五級下の「本科第五等ノ一」に在籍した加藤政之助は安政元年七月生まれの二十二歳、同じく犬養毅は安政二（一八五五）年四月生まれの二十二歳と、みな思軒より三歳から七歳も年長である。かろうじて、「童子科第一番」に在籍した矢野貞雄だけが、思軒と同じ文久元（一八六一）年十一月生まれの十五歳。後に思軒とともに「報知叢談」欄に翻訳作品を掲載することになるこの矢野龍溪の実弟は、思軒が退学した二年三月後の明治十二年七月になっても、いまだ「本科第四等」のクラスにとどまっている。矢野が遅いのではない。思軒が早すぎるのだ。十五歳で、出席割合が「四一」パーセントという状況にもかかわらず、大試業で「六九」点を取り、天下の慶應義塾の最上級クラス中七番の成績をおさめたというのは、それこそ神童の部類に属するといっても過言ではないほどの秀才ぶりであった。

ともあれ、思軒は三田の慶應義塾をあとにして、郷里の備中笠岡に帰る。帰郷後の詳しい行動はあまりわかっていないようだが、谷口靖彦氏の『伝記 森田思軒』によれば、二年間ほどをなにもしないで漫然と過したようだ。その後、明治十二年二月になって、彼は、世間体を気にする父親の勧めにより、備中後月郡の漢学塾・興讓館に入塾する。当時、同館の館長を勤めていたのは、坂田警軒といっ

て、のちに同志社や慶應義塾、哲学館などで講師を勤めた高名な漢学者であった。徳富蘆花の自伝風小説『黒い眼と茶色の目』の中にも登場する、この「篤実、謹厚な」師のもとで、思軒は、明治十五年四月まで三年余にわたって漢学の研鑽に励む。その成果はめざましく、入塾二年目にして早くも「都講」と呼ばれる塾頭となった。ここでも思軒の学才は、一頭地を抜く、秀抜なものであったことがうかがわれる。

しかし、その一方で、同窓の塾生からは思わぬ反発を招くことになる。当時の興譲館内には思軒の才気をねたむ次のような中傷文が出まわったと、谷口氏の『伝記』は伝えている。

《サテ我館ノ大変事、コハ何ヤラント尋ヌレバ、是ゾ則チ備中国、笠岡村ノ若段名、『目ザシ』ノ様ナ顔ツキノ、音ニ名高キ森田君、文蔵殿ト呼バレケル、中国筋ノ才子トテ、興譲館ノ生徒ナリ、近来頻リニ立身シ、遂ニ都講ト為レバ、兼テ得意ノ権勢ヲ、張リタル上ニ又張リテ、威厳々々重ヌレバ、五人十目ノ見ル処、十人百指ノ指ス処、館中諸子ノ憤懣ハ、日々重ネテ月々積ミ、山ヨリ深ク海ヨリ高シト云フガ如クニテ、其積末ハ何者ノ得テ譬フベキ無カリケリ》

「目ザシ」のような顔つきの森田君とは、よく言ったものだ。私などは、眼光鋭き思軒の顔を見て、異国の映画俳優を思い浮かべることがあったが、めざしとは想像だにしなかった。映画俳優がめざしに変わるというのは、例の、心理学でよく用いられる、若い女性の姿が、見方次第で、老婆の顔に化ける絵と同じで、観られる側よりは観る側の心のありように問題がある。思軒を揶揄することの中傷文も、批判される思軒よりは、むしろ批判する塾生の心理をより反映するものとなっている。人を批評するという行為には、常にこうした批評の対象者ばかりか、批評者自身の心のありようが問われるという二面性がそなわっていることに留意する必要がある。

思軒の精悍なマスクをいわしの頭と結びつけるその心のありようが、一方では、一心不乱に勉学に邁進する思軒の姿を、「権勢ヲ、張リタル上ニ又張リテ」、威張りまくる態度と受けとらせる。その根底にあるのは、怨みとねたみということになるが、問題は、その怨みとねたみが一体どこに胚胎するものであったかということである。

それは、一つには、当時、興讓館で採用されていた「輪講」という学習法に原因があった。その学習法を簡単に説明するとこういうものである。まず、塾生全員が講堂に集まって、くじ引きで講義を行う学生を決める。その学生の講義に対して、他の学生たちは分からない点を容赦なく質問する。無事に質問に答えられる学生は大いに面目をほどこすが、そうでない学生は大変な不名誉を味わわされることになる。こうした学習法は、優秀な学生にとってはそれほど苦痛ではないかもしれないが、たびたび講義の進行を妨げられ、立ち往生した経験をもつ学生にとつては大変な苦しみの種となりかねない。なかには、心に怨みをつのらせ、いつかその質問者に仕返しをしてやろうと、復讐の機会をうかがうような者もでてくる。

思軒が、わずか二年ほどで、「都講」とよばれる塾頭に登りつめたというのは、そうした学習の過程でも容赦のない議論に加わり、それを勝ち抜いていったということのあらわれであろう。そしてその当然の結果として生じてきたのが、「館中諸子ノ憤懣」であった。やがて、その「憤懣」は、「山ヨリ深く海ヨリ高く、何ものにもたとえようがないところ」にまで高じていって、爆発する。思軒をふとん蒸しにして日頃のうつぶんを晴らそうという計画がひそかに塾生たちの間にもちあがったのである。

さいわい、その計画を事前に察知した思軒は、実家に逃げ帰り、そのまま興讓館を退学する。思軒にとつて、慶應義塾について二度目の中途退学ということになるが、その原因は必ずしも思軒の側にあったとばかりはいえない。たとえば、「輪講」の場でもう少し手心を加えていればというような見方もできるかもしれないが、漢学の道を究めようという情熱に燃える思軒にとつて、たがいに真劍勝負で臨むべき議論の場に同情や思いやりを持ち込むなどということはとうてい考えられないことであつた。彼は、その当然の結果として、仲間のうらみをかき、同館を去らなければならないことになつたのである。あまたの俊秀の中でもひとときを群を抜いた思軒の才能、そしてその若さ、理想に燃える志。それが、思軒が興讓館を去らなければならないかつた真の理由であり、おそらくは、それこそが慶應義塾を去らなければならなかつた真の理由でもあつたとわたしには思えるのである。

興讓館を退学した後の思軒は、笠岡近傍で得意の演説を披露するなどして無聊を紛らわしていたが、かつて中央の居並ぶ秀才を相手に天下国家を論じたことのある身には、とても満足できるものではなかつた。得意の詩作に耽つてみたりしたが、やはり心の空白を満たすまでにはいたらなかつた。そんな折も折、かつての恩師・矢野龍溪が、前島密、尾崎行雄とともに大阪を訪れるという知らせが思

軒のもとに舞い込んだ。渡りに舟とばかりに思軒は龍溪に会いに行く。そのときの龍溪との会見の様子は、父佐平が思軒の弟安次郎（安治）にあてた書簡に次のように書きとめられている。

《文蔵事……其夜先生ニあひ拙者の書状をさし出し、其後の成行又此度の次第並ニ文蔵の志しの都合等申述たる所、先生ニも文蔵の事ハしじゅう思ひ居、今共ニ事を相談し居たる尾崎氏とも噂致居たる事なり。吾等も当所へ当分滞在するニ付、文蔵にも当分逗留致すべく、其内ニハ何とか能都合も致可遣と親切なる御嘶に付、大ニ喜び居るとの事廿三日夜十二時認の書状ニて申越せり。》<sup>188</sup>

（明治一五年六月二五日付、佐平より森田安次郎あて書簡）

思軒が去つた後も、思軒のことを「しじゅう思ひ居」つたとはいかにも矢野らしい。一体に矢野という人物は、人情味にあふれる優しい心の持ち主で、彼が慶應義塾の学生であった頃、親からもらっていた八円という仕送りに多少のゆとりがあったため、貧しくて東京で学ぶことのできなかつた同郷の藤田茂吉（鳴鶴）を呼びよせて、「安部屋」に共に自炊をしながら勉学に努めたという有名なエピソードが残されている。かつて同僚に示した思いやりは、今度は弟子の思軒に対して示される。矢野は、この手紙にも記されているように、思軒の志に耳を傾け、万事その相談に応じていった。思軒は、矢野に勧められるままに、一行が大阪に滞在する一月あまりを矢野の傍らで過ごす。その間に、思軒は上京の決心をかため、矢野は、折をみて思軒を自分のもとに呼び寄せる約束をして東京に帰っていった。

思軒親子のところ矢野からの手紙が無い込むのは、それから二ヶ月あまりが経過した、十月七日のことであった。わたしは、偶然、そのとき矢野が笠岡の思軒父子に宛てた手紙を所有している。一文の趣旨は、東京もようやく流行病が衰え、そろそろ出京も可能ではないかと思う。来京の際は、及ばずながら「百事御相談」にのらせていただく云々というものである。矢野がそれを東京の報知社から送ったのは明治十五年十月二日のことで、笠岡到着の消印は十月七日となっている。矢野が帰京したのは八月十日のことだから、その間二ヶ月もの時間の経過があったことになる。

どうして、それほどの時間を要したのかという疑問がわくが、その理由は手紙の中に「小生事、大故に遭ひ、百事俱に度す」という表現で書きしるされている。すなわち、母のコマが五十二歳で息を引き取ったのだ。それをいかにもこの時代の知識人らしく「大故（父母の喪）に遭ひ」という言葉をもつて表現している。そして、そのためにいろいろなこと一遍に過ぎていった（「百事俱に度す」というのが手紙の遅れた理由である。葬儀の際には思軒親子も弔辞を送ったとみえ、「不幸の節は御吊詞を賜り是亦御礼申入候」とある。それ以外にも思軒親子が何かにつけて消息を知らせていたことは、冒頭に「毎度貴束を辱し万福之状を審にす」とあることからわかる。わずか、十三、四行の短い文面ではあるが、矢野や思軒親子の動静が手に取るようにわかる、なかなか味わいの深い文章である。<sup>20</sup>）

要するに、矢野の帰京後二ヶ月間、双方の連絡が絶えていたわけではなかった。矢野としては、母の葬儀が終わり、大阪京都を視察した際の「京坂紀行」の執筆が一段落し、その頃全国を席卷していたコレラがようやくやぐ下火になったのをみて、思軒にそろそろ出京してはどうかと勧めたのである。思軒はもちろん欣然としてその誘いを受ける。父佐平も、息子の将来を考えて、東京の矢野のもとに預ける決心をする。ときに思軒二十一歳、翻訳家思軒の門出のときでもあった。

## 六 自己確認

思軒はかくして矢野のもとに馳せ参ずるが、上京後も、矢野は、陰に陽に思軒を支えた。とくに、これまでの支援が、主としてその精神形成面での支援（すなわち生徒に対する教育者としての支援）であったのに対し、出京後は、そうした精神形成面の支援に加えて、思軒が世に立つための基盤づくりにおいても、大いなる支援を行った。それは、明治十六年二月に発表された矢野の『経国美談』（前篇）の巻末に、思軒の「正史摘節」と題する翻訳が掲げられているのをもてみてもわかる。前出の富岡敬之氏が紹介する思軒関係の未発表の書簡文中には、矢野自らがそれを思軒に依頼したという次のような証言がのこされている。

《（先生）此夜新著之小説巻末二載候希臘史抄ヲ漢訳致可呉。且ツ夫レニハ足下之前号ナリト記スヘキ様託セラレ候。》（明治十六年二月四日付、思軒より父佐平あて書簡）

矢野がここで思軒に依頼したことの概要を前後の文章の内容を補いながら説明すると、今度の新著『経国美談』の巻末に、君のギリシャ史の漢訳を載せてほしい。それには、先に『郵便報知新聞』に「沈紫生」なるペンネームで発表した君の漢詩が、報知社内で大変評判になっているので、その「沈紫生」という号が君の号だということを明記してほしいというものであった。いかにも慈愛にあふれる矢野の配慮がありありと読みとれる文章である。

このように、矢野の心の内にあったのは、すでに社会的な地位を得ている自分の名前と結びつけることによって、愛弟子思軒の名を世に知らしめていこうという狙いであった。その狙いが功を奏して、思軒は次第に世に受け入れられるようになる。そのことは、この手紙が書かれる前後から、思軒が文筆家として世に認められるまでの一連の流れをたどってみれば一目瞭然となる。

まず、発端は、明治十六年一月十七日の『郵便報知新聞』に思軒が「沈紫生」の筆名で掲げた「雑感五首節三」と題する漢詩にある（富岡氏の考証による）<sup>(16)</sup>。それが報知社内ですべて評判になり、矢野の新著『経国美談』にギリシャ史の漢訳を依頼されたというのが先に掲げた書簡文の趣旨である。その翻訳が掲載された前篇が同年三月に出版され、さらに、翌年二月には、初めて思軒の名前が署名された「抜」文をとまう後篇が出版される。前篇の翻訳、後篇の「抜」文とともに注目を引いたのは、前・後篇の各ページ上に掲げられている頭評であった。それも思軒が担当したもので、内容は本文の趣旨に即して漢文で評釈を加えるといったものである。『経国美談』が評判を増すにつれて、これらの「正史摘節」、「抜」文、頭評の評判も高まって、思軒の名前は徐々に世に受け入れられていった。「読書社会が思軒居士の手腕を認めしは『経国美談』の龍頭批評なりき」という『早稲田文学』（明治三〇年二月号）の記述が示すとおり、思軒の文筆家としてのデビューには矢野の力が大きくあずかっていたとみて間違いないのである。

その一方で、矢野は、教師としての指導という面においても、従来どおり思軒に対する支援を惜しまなかった。上京した思軒の心に一番重くのしかかっていたのは、自分は何になつたらいいのか、あるいは何をなさなければならないのかということであった。東京に到着して荷をほどく間もなく、思軒が郷里の佐平に送った手紙には、自分は「漢籍をより深く極め、政界に打つて出よう」というような気負った発想がみられる。それはいまだ世間というものを知らない出郷直後の青年が導き出した結論であり、真に自分の向かうべき

方向を広い視野に立つて考察した結論とはなっていない。そんな頑かたくな思軒の心に、「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……日本より頭の中の方が広いでせう」といった広田先生式の論法で風穴を明けたのは、やはり矢野であった。矢野は、思軒の漢文の才能を十分に認めた上で、あえて、漢籍よりも洋書を勧め、政治よりも文学を目指せとアドヴァイスするのである。それを伝える矢野の狙いは次のようなところにおかれていた。

《泰西之文学ハ之「漢籍」ニ異ナリ船ヲ大洋ニ放ツガ如ク、浩々蕩々、涯□ヲ弁ゼサル程広大ナリ。去レハ足下位漢籍ヲ読ミ詩文ヲ能クスル者ニシテ此汲々スルハ、左程之大益ハ可無之、洋書ハ数年放擲シ居ルモ一年間独リカメテ温習セハ、大ニ上達之効見ベシ。而シテ後肆ニ海外之奇書ヲ覧觀シ、或ハ翻訳、或ハ著述相致シ、政事世界之如キ俗塵ヲ避ケ、別天地ヲ關テ隱居シ、一隅ニ在リテ隱然世間ヲ動サバ無上之快ナランカ。》（明治一五年一〇月二四日付、思軒より父佐平あて書簡）

西洋文学の世界は限りなく広い。洋学をきわめ、それをもとに翻訳や著作に従事し、世の中の一隅から社会を大きく突き動かしていることは政治の俗界に身を沈めるよりは、はるかに大きな喜びが伴うだろう。おそらくは、矢野自身の心にも向けられていたと思われるこのいましめの言葉は、単に『経国美談』に執筆の機会を与えるという外的な支援以上に大きな恩恵を思軒の将来にもたらすものとなった。

そうした時宜をえたアドヴァイスのお陰で思軒の心が次第に洋学へと向かっていく様子は、故郷の父に報告した近況報告の中にはつきりとみてとることができる。この手紙が書かれた二ヶ月後の十二月十二日付の佐平にあてた手紙には「又洋書モ日ニ易キヲ覚へ、読書ニハ差シタル苦勞モ無之候。入京来読ム所、万国史、英国史、羅馬史ヲ卒リ候」と、洋学に専心している様子がうかがえる。そして、上京から一年半が経過した明治十七年四月二十日の手紙をみると、自分の学問がどのような傾向をおびたものかを分析し、それをもとに将来の向かうべき方向をはつきりと打ち出した、次のような注目すべき記述が見いだされる。

《小生諸名士ニ交リテヨリ自ラ量リ又タ人ヲ測リ候処、打明ケタル所ニテ漢字一道ニ至テハ誰トテ小生ノ右ニ出ツヘキ者ハ一人モ之レ無ラン歟。左レ共洋学ニ至テハ大抵小生二十倍セルモノニ非ルハナシ。是レ素ト其筈ニシテ、彼レノ洋学ヲ攻メタル頃ハ恰モ我レノ漢学ヲ始メタル時ナレハ彼我ノ差ハ宜ヘナリト申スヘシ。今日小生ノ諸先輩ノ間ニ容レラル、者ハ、寧ロ漢字ノ余光ナリト申スモ不可ナカルヘシ。故ニ若シ小生ヲシテ今年モ一心目ヲ横文ニ注カシメハ、所云二百ノ力ヲ蓄ルトノ事ハ未タ及ハサルニモセヨ、稍ヤ庶幾カラント存候。》（明治一七年四月二〇日付、思軒より佐平あて書簡）

ここで注目されるのは、思軒が試みている彼自身の学力分析である。自分は、漢学では人後に落ちないが、洋学となるとほとんどの者が自分よりも十倍も力のある者ばかりである。この冷静な分析の上に立って、思軒は将来の目指すべき方向を洋・漢バランスのとれた学問の修得と定める。この先は一心不乱に横文字を勉強し、洋・漢双方の学問に長じ、世間を余裕のうちにわたっていこう、と。しかし、世の中はそううまくはいかない。この時の思軒の年齢は二十二歳。いかに思軒が語学の達人であつても、十代のみずみずしい感覚で修めた漢学のレヴェルにまで洋学を向上させるのは並大抵のことではなかった。のちに徳富蘇峰が「思軒の学は漢七欧三、若し之を顛倒せば、恐らくは今日の思軒にあらじ」といっていることからも推察されるように、その洋学の実力はせいぜい漢学の半分ほどのところまでしか達しなかった。

要するに、洋学に関しては周囲の者を凌ぐところまではいかなかつたということになる。それもそのはずで、思軒自身が冷静に分析しているように、彼が漢学に専念していた十代の最も重要な時期に、ほかの人々はみな洋学の修得に励んでいたのだ。たとえば、明治二十年代の文壇において、思軒と対極的な位置をしめていた二葉亭四迷もその一人で、彼は、思軒が漢学を修めていた頃、具体的に言えば、十六、七歳以降の五年間、東京外国語学校でロシア語を学んでいた。その修めた学問を、徳富蘇峰式に表現するならば、「欧七和三」、あるいは「欧八和漢二」と、どんな配分になるか知らないが、いずれにしても、かなりの割合で欧の部分が入っていたことは間違いない。

こうした当時の人々が身につけた新旧の学問の割合、ないしはその順序は、学問の流れが漢学から洋学へと大きく入れ替わる明治二



十年代にあつては、われわれが想像する以上に重要な意味をもっていた。思軒と二葉亭は、ともに、明治の翻訳文体に一大転機をもたらした『繫思談』（明治一八年刊）のあとを受けて、西洋の「精緻ノ思想」を写し取る新訳文体の創造に向かいながら、その身につけた学問に応じて、一方は漢文訓読体風の文章で、もう一方は、和・漢の伝統的学問の範囲を超えた、まったく新しい口語文章で、細部の味つけを試みた。それはそれで、彼らの信念と語感にもとづいてそうしたので、本来、優劣を分かつ基準となるようなものではない。口語文で味つけしようが、漢文崩し体で表現しようが、芸術的にすぐれたものはすぐれたものといことになる。

しかし、新旧の学問が大きく入れ替わる転換期の文学界においては、彼らの翻訳文体は、その背景をなす学問と同じ消長をたどらねばならないというきわめて苛酷な運命にさらされた。すなわち、旧学問による教育を受けた読者が多数を占めていた明治二十年代においては、前者の文章が絶大な人気を博し、時代が徐々に欧文脈を基礎とする口語文体へと傾いていった明治三十年代になると、それに代わって後者が圧倒的な支持を得ていった。そして、そのまま変わることなく現在の評価へとつながっていくことは人のよく知るところである。いつの世でも、時代が大きく変わる転換期には、ほんの些細なことが人の運命を大きく左右する。思軒の場合も、仮に慶應義塾を中退せずにそのまま洋学を続けていたら、また違った運命をたどったと思われるが、そのときは今日われわれが目にする「漢七欧三」の思軒の訳文はこの世に存在しなかったということなる。

ともあれ、この手紙をしている思軒には、そうした将来の運命のことはなにもわかっていなかった。彼は、とにかく、それまで身につけた漢学に加えて洋学を学ぶ決心をし、それに向かって努力を惜しまなかった。その結果、「文明東漸史外篇序」などの序文において、あるいは「北清紀行」「上海通信」などの海外報告において、徐々にその文筆家としての才能をあらわしていったのである。そんな思軒の成長を誰より喜んだのは、ほかでもない、師匠の矢野龍溪であった。『経国美談』の発表後、その著作収益をもとに欧州視察の旅に出ている矢野は、明治十八年十月、滞在先のロンドンから父親の佐平にむけて書簡を送る。その目的は、将来自分の片腕として『郵便報知新聞』の仕事を手伝ってもらいたいので子息の欧州行きの資金援助をお願いできないか、というものであった。以前にも思軒とともに北京に赴いてその特派員報告を執筆した経験のある矢野は、今度はロンドンに思軒を呼び寄せて自分の代わりに欧州通信記事を担当させようというのである。矢野の見積もる諸経費は千五百円という高額ではあったが、息子の将来を考えた佐平はすぐにそれに同

意する。

かくして、思軒は文字通り矢野の手足となつて『郵便報知新聞』の紙面づくりを支えることになつた。同じ時期に大隈重信にあてた矢野の書簡にはこうある。すなわち、「吉田燾六ト森田ト右翼ト致シ候ヲ得ハ小生之支体始テ全備致シ必勝之戰ヲ為ウヘシト奉存候」と。これが単なる口先だけの揚言でなかつたことは、磯辺弥一郎が『中外英字新聞研究録』の中で、「故吉田燾六と森田氏とは同窓の友にして、同じく報知社に於て矢野龍溪氏の幕下と為り、爾來、此二人は形影相伴なふが如く、一は俗才を以て、一は学才を以て genius の名ありし者」と報告しているのを見てもわかる。まず矢野がはじめた欧州通信記事を、思軒が受け継ぎ、思軒の帰朝後は吉田燾六が受け継ぐというように、矢野の「支体」はこの二人の存在をもつて、はじめて「全備」するものとなつたのである。

## 七 翻訳家思軒の誕生

しかし、こうした文筆家・ジャーナリストとしての成功がそのまま翻訳家としての成功につながつたと見るのは早計である。思軒が名翻訳家として世に認められるにはまだ一つ超えなければならぬ大きな山があつた。仲間のあいだで文才を認められた者が、必ずしも大衆に名を知られる名文章家たりえないのはいうまでもないことである。古來、文章家として知人間に知られた者が、名を埋め人に知られずこの世を後にした例は枚挙にいとまがない。とりわけ、新旧の価値観が大きく入れ替わる転換期の文学界にあつては、そうした傾向が著しかった。思軒の場合も、下手をすると、報知社の仲間うちのみその漢文の才能を認められる人物で終わった可能性は充分にある。しかし、彼はそうはならずに、広く大衆の間に盛名をとどろかす名翻訳家として世に羽ばたいていった。

なぜそういうことが可能であつたのか。それには外的、内的の二つの要因があつたと思われる。まず外的要因として挙げなければならないのは、欧州視察旅行から帰つた矢野が着手した『郵便報知新聞』の大改革である。明治十九年九月十六日、矢野は同紙に「改良意見書」なる一文を掲げ、紙面の刷新を發表する。その要点を、簡単に書き出すと、①価格の引き下げ、②紙面の縮小、③記事の精選、④責任ある論説の掲載、⑤文章の平易化、⑥掲載内容の刷新等々であつた。このうち、われわれが最も注目しなければならないのは、⑤の文章の平易化である。矢野は、その具体的な改良点として、「六ヶ敷文字には渾て傍訓」を施し、「男子のみならず婦女女子迄も容易

に読み得る」ようにし、「文字の数を減少」する、ということをおこなっている。つまり、記事の徹底した平易化・大衆化を図ろうとしたのだ。

この大衆化の方向に向けた紙面の刷新こそは、翻訳家思軒の誕生にとって欠かせない重要な要因となったものである。その刷新のなから「嘉坡／通信 報知叢談」と題する「小説」欄が生まれ、その「報知叢談」欄に作品を掲げるということをきっかけとして思軒という名翻訳家が生まれる。矢野の「改良意見書」が掲載された三日後の九月十九日の『郵便報知新聞』には、そうした名翻訳家・思軒誕生のプロセスを確認づける次のような注目すべき「広告」が掲載される。

《本紙上に一種の小説を相掲げ候かねての計画に候処、何分改革早々にて是 処二三日中には手廻りかね候へ共、先づ取敢へず茲に其仕組を御吹聴申置候、

藤田鳴鶴、箕浦青州、加藤城陽、枝元口岳、矢野三峽、井上孤山、森田思軒、尾崎学堂、矢野龍溪

右社友九名更るく三四日読切りの小説を訳述し、又は自作し匿名にて之を本紙上に載する事、尤も是は社友各自、文苑の英華を闘はず腕試の義に候へば、一ヶ月又は二ヶ月の終りに於て広く読者諸君の公評を乞ひ度、其節には読者諸君、何卒右相掲げたる小説に付、何は面白かりし、何は面白くなかりし等、夫々甲乙の御鑑定付を御寄せ下され候様、前以て御依頼申置候也。》

思軒がなぜ「小説の訳述」に手を染めるようになったのか。それはこの「広告」からもわかるように、『郵便報知新聞』に筆を執る者に与えられた一種の課題に答えるためであった。それは単なる個人に与えられた課題とは違う。そこに健筆をふるう九名の名だたる記者による「腕試」というかたちで与えられた（社命）の色彩をおびるものであった。同時にその（社命）には、「男子のみならず婦女子迄も容易に読み得る」ように「俗語にて分り易き丁寧なる文字を用ふべし」という、新聞全体に課せられた大きな制約もあった。そうした難題に答えるべく、教養人思軒が心のなかで練り広げた産みの苦しみ、それこそが、私のいう内的要因というわけだ。

矢野が打ち出した『郵便報知新聞』の大衆化路線、その大衆化路線にマッチした翻訳文学を創り出そうという産みの苦しき、この外

的、内的の二つの要因が一つに結びついてはじめて生まれてきたのが思軒という翻訳家である。これは単なる私の推測ではない。文章の平易化、漢字使用の制限という課題に答えるために思軒が経験した創作のための様々な苦しみは、弟子の原抱一庵が、思軒の口からくり返し聞かされた話として書き残している。『少年園』に掲載されたその回想談は、ここに掲げた広告文と事実関係において大体の一致が見られ、思軒が矢野の命令に答えるべく平易な訳文を産みだしていくまでの経過をたどる上で大変貴重なものといえる。これまで思軒関係の伝記や評伝にもあまり紹介されたことがないので、以下にその大要を掲げてみることにする。

《往年矢野文雄氏、欧州より帰り、大いに新聞紙に革命を施さんと欲し、先づ伊太利地方新聞に倣ふて、報知新聞紙上に文学に関する一欄を設け、社員をして交るく小説若くは物語りやうのものに筆を執らしむ。(所謂大新聞なるものに小説を掲ぐるは、報知新聞を嚆矢とするなり)時に思軒居士森田文蔵、年壮に気鋭に、而して才名未だ顕はれず、窃かに脾肉の歎なき能はず、吾が技倆の程を示すは此時なりと思ふて、或はヴェルヌの骨髄なりと思ふ所の一節を剥ぎ来りて、此れにアラビアンナイト中の最も微妙なる章句を加味し、拮据經營、是ならば天下の喝采受合なりと信じて、之を紙上に掲げたるに、豈図らんや、世間の評判甚だ香ばしからず、啻に香ばしからざるのみならず、現に一地方などよりは『思軒居士とか云ふ人の文は、固陋迂文にして面白からざること此上なし、斯る編輯人を置かれては、報知新聞の不為なり、速かに放逐せられて然るべし』との注文状すら到来し、矢野社長よりは小説中止の厳命下り、居士の狼狽一と方ならず、それより大に工夫を仕替へ、言はんと欲する所を言ひ扣へ、書かんと欲する所を内端にし、文字なども成るべくは平凡普通のものを使ひ、經營慘憺小心翼翼、程経たる後『英曼二学士の話』即ち後に『鉄世界』と題して今日世に流布する小説を、嘉坡通信中に翻訳するに及びて、始めて矢野社長の信用も幾分か加はり来り、放逐注文状の到来も漸やくに稀れになれり。是れ思軒居士自から屢々余に語り、共に一笑する所の談柄なるが、単り思軒居士に限らず、今日世に多少の文名を博し、文壇の幾戦場を闊みし来れる人には必らず此種の珍談あらざるはなきなり。》

まず、ここに言及されている翻訳作品の特定をしておく、「英曼二学士の話」として最後にあげられているのは、正式には「仏、曼

「二学士の譚」<sup>はな</sup>といつて明治二十年三月から五月にかけて「報知叢談」欄に掲載されたものである。それ以前に発表された思軒の翻訳作品は、「印度太子舍摩の物語」（明治一九年一〇月）、「金驢譚」（同二〇年一月〜二月）、「英国士官の物語」（同三月）の三篇しかなく、おそらくここでヴェルヌの「骨髄」と『アラビアン・ナイト』の「章句を加味」して作ったと述べられている作品は、内容の上からみて「印度太子舍摩の物語」であつたと考えられる。その読者の評判はすこぶる悪く、そんな「固陋迂文」をひねりまわす者は「放逐」すべしという読者の投書さえ舞い込んだ。先ほどの「広告」の言葉を借りれば、読者を審判とする最初の「腕試」<sup>うでこほ</sup>において思軒は敗北を喫したというわけだ。それではならじと、「仏、曼二学士の譚」においては、「言はんと欲する所を言ひ扣へ、書かんと欲する所を内端にし、文字なども成るべくは平凡普通のものを使ひ」等々、大胆な方向転換を試みた。それが、矢野の目指す「男子のみならず婦女子迄も容易に読み得る」ように「俗語にて分り易き丁寧なる文字を用」いるという『郵便報知新聞』の大衆化路線と歩調を合わせるかたちでなされた方向の転換であつたことは論をまつまい。その結果、「矢野社長の信用」も加わり、「放逐状」の到来も稀になつた。いつてみれば、それは、報知社内での第一の漢文の使い手である思軒が、ありあまる漢文の素養と読者大衆の要望・好みとの調整をはかるべく試みた方向の一大転換であつた。裏を返せば、矢野の定めた新聞の大衆化路線に促されたその方向の大転換こそは、名翻訳家思軒を誕生させる第一の要因であつたことになる。

抱一庵もいうように、「今日世に多少の文名を博し、文壇の幾戦場を閲みし来れる人には必らず此種の珍談」のないものはない。「十分の力を三分は包みて、七分丈けを筆に上ほすにあらざば、失敗せざること殆んど罕なり」と抱一庵はいう。それは、仲間のあいだにのみ名を知られる文章家が広く世に受け入れられる人気作家へと飛躍をとげていくために超えなければならない大きなハードルであつた。

ともあれ、思軒は「小心翼翼」「経営惨憺」の努力を重ねた結果、「仏、曼二学士の譚」の翻訳文体を創り出す。実際、それがどのような文章であつたのか、以下に同作品の冒頭の部分を掲げてみると、「『成程是等の新聞は流石に英国中屈指と称せらるゝだけありて善くも書きたり』と独語きつつ卓子の上に一枚のデーリー、ニュースを抛げ出せるは年紀凡そ五十二歳にもならん歎……」<sup>（388）</sup>というような調子のものである。確かに、むずかしい漢字にはルビが振つてあるし、会話文もそれなりにこなれた文章となつていて、漢学の素養

に欠ける今日のわれわれにもそれなりに理解可能な文章となっている。これを「印度太子舎摩の物語」の文章と比べてどこか大きな違いがみられるかといわれると、即答に窮する面もなきにしもあらずだが、全体的に会話文が多用され、文章の平易化がはかられているという感じは確かにする。思軒は、この「仏、曼二学士の譚」の連載が終了する五ヶ月後に「翻訳の心得」という一文を発表して、「翻訳の文は成る可く平易正常の語を択み、特種の由来理義を含まざる癖習なき語を択み、談話的の語を用て文章の道に由らば、庶くは上乘に幾からん」と述べているが、それはまさに「仏、曼二学士の譚」を執筆する際の産みの苦しみの中からつかみ取った思軒独自の翻訳論であったといえるだろう。

「平易正常の語」を選び、「談話的の語」を用いるなどと聞くと、なにか言文一致体のような斬新な文章を想像しがちだが、そこは「漢七欧三」の教養を身につけた思軒のこと。あくまでもその教養の範囲内での、「平易」化、「談話」化であった。とはいっても、そうした漢文の響きをとどめた思軒の文章が、和・漢旧文体によって文章上の洗礼をうけた明治二十年代の人々の心には、限りなく魅力に富んだ文章であったことは間違いない。「仏、曼二学士の譚」について、「天外異譚」（明治二〇年五月〜七月）、「盲目使者」（同九月〜十二月）、「炭坑秘事」（同二年九月〜一〇月）と、「報知叢談」欄にその連載が重ねられるにつれ、思軒は誰一人知らぬものとしてない人気作家の一人となっていた。そのころ札幌農学校の学生であった原抱一庵は、同欄に掲載された思軒の作品が面白くてたまらず、「一日の新聞を二遍も三遍も五遍も六遍も繰返して読んだ」と述懐している。

当然のことながら、『郵便報知新聞』の売り上げ部数も伸びた。そこに「報知叢談」欄が掲げられる以前の明治十八年の同紙の年間発行部数は一七万五千部であったのに対し、思軒の翻訳が掲げられて二年あまりが経過した明治二十一年の年間発行部数は、六六四万七千部と四倍近くにも跳ね上がっている。しかも、東京の新聞売り上げ高の順位でいうと、第八位から第一位への躍進であった。まさに、矢野と思軒の子弟コンビが苦心惨憺の結果つかみ取った一大勝利であったということになる。

注

(1) 思軒が大阪の慶應義塾に入學するのは明治七年五月二十九日。一方、矢野が校長として同校に赴任するのは明治八年一月。その間に二人が顔を合わせていたかどうかは不明。『慶應義塾入社帳』（福澤研究センター編、慶應義塾、昭和六一年三月）、および福島タマ編「年譜」『矢

- 野龍溪集』明治文学全集15（筑摩書房、昭和四五年一月）参照。
- (2) 矢野文雄「改良意見書」『郵便報知新聞』明治一九年九月一六日。
- (3) 森田思軒旧蔵、慶應義塾大学所蔵の写真による。なお、同写真の複写を入手する際に、福沢諭吉協会理事の竹田行之氏の協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。同写真は『福澤手帳』95号（福沢諭吉協会、平成九年一月）に掲載。
- (4) 富岡敬之編「森田思軒関係書簡」『岡山県立博物館研究報告』第1号（岡山県立博物館編集発行、昭和五三年一〇月）五八頁。
- (5) 山下重一・小林宏・日朝秀宜 校訂・解題「城泉太郎が語る徳島慶應義塾と矢野文雄」『福澤手帳』94号（平成九年九月）一一二頁。
- (6) 『慶應義塾入社帳』Ⅱ（福澤研究センター編、慶應義塾、昭和六一年三月）七八〜七九頁。
- (7) 正式なタイトルは「明治九年四月廿六日ヨリ七月廿七日迄／慶應義塾学業勤惰表」、同じく「明治十年一月十日ヨリ四月十三日迄／慶應義塾学業勤惰表」というもの。
- (8) 柳田泉「森田思軒伝記稿」『明治初期翻訳文学の研究』（春秋社、昭和三六年九月）四一三頁。
- (9) 「広告」『郵便報知新聞』明治一九年九月一九日。同じものが、翌二〇日より「社告」と表題を替えて、二一、二二、二三、二四日の六日間掲載されている。ただし、二〇日以降の執筆者名は、ここに掲載された九名に曾宮米華、芳川春濤の二名を加えた一一名となっている。実際の「新坡通信／報知叢談」がはじまるのは最初の「広告」掲載日から数えて一二日後の十月一日のことであった。同「広告」の全文は第七章の「翻訳家思軒の誕生」に掲載。
- (10) 「赤坂亀次郎」『慶應義塾出身名流列伝』（三田商業研究会編纂発行、明治四二年六月）参照。
- (11) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』四一三〜四四頁。
- (12) Francis Wayland, *Elements of Moral Science*, Gould and Lincoln, 1873. 同書は縦一六センチ、横一一センチ、全二二三頁の小型本で、一八三五年の初版を教科書用に短縮したものである。中表紙には、「abridged, and adapted to the use of schools and academies」の文字がみえる。本書が慶應義塾のテキストとして使用されていたことは、中扉に「慶應義塾之印」の朱印が押され「第拾四号」の墨書があるのと、その前頁のフライ・リーフに「慶應義塾古本売払」の朱印が押されているところからみて間違いない。
- (13) 高村象平「私学慶應義塾と福沢諭吉」『別冊太陽 慶應義塾百人』（平凡社、昭和五五年三月）七頁。
- (14) 富田正文監修・丸山信編著『福沢諭吉とその門下書誌』（慶應通信、昭和四五年五月）参照。
- (15) 谷口靖彦『明治の翻訳王』**伝記** 森田思軒（山陽新聞社、二〇〇〇年六月）四六頁。
- (16) 徳富蘆花「黒い眼と茶色の目」『泉鏡花 徳富蘆花集二』現代日本文学全集54（筑摩書房、昭和三二年）。

- (17) 谷口靖彦『明治の翻訳王』**伝記**「森田思軒」六四頁より引用。
- (18) 富岡敬之編「森田思軒関係書簡」六六～六七頁。
- (19) 丸山信「矢野文雄」『別冊太陽 慶應義塾百人』四八～四九頁。
- (20) この矢野龍溪が思軒父子に送った書簡の全文は以下の通り。なお、解説に当たっては結城秀雄氏の協力を賜った。記して感謝を申し上げます次第である。
- 《毎度貴束を辱し、万福之状を審にす、拝賀致候。小生事、大故に遭ひ百事俱に度す。且つ少しく瘠背に患所を覚へ、執筆自由ならず、呈書遅延致候。最早東京も流行病も衰へ候に付、文蔵様御出京被成可然存候。乍不及、百事御相談可仕候。右御返詞迄、如斯御座候。不幸之節は御吊詞を賜り、是亦御礼申入候。先つは要用如斯御座候。謹言。 矢野文雄 拜／十月二日》
- (21) 明治期に日本は何度かコレラの災厄に見舞われているが、明治一五年の流行においては、患者数五一、〇〇〇人、死亡者数三三、〇〇〇人を数えた。東京でも中心部の死者は四、五〇〇人を超えたといわれる。
- (22) 富岡敬之「森田思軒未発表書簡について」『日本文学論究』第三九冊（國學院大学国語国文学会、昭和五四年七月）五二頁。
- (23) 富岡敬之、前掲論文、五一～五二頁。
- (24) 富岡敬之、前掲論文、五三頁。
- (25) 夏目漱石『三四郎』（春陽堂、明治四二年五月）二五頁。
- (26) 富岡敬之「森田思軒未発表書簡について」五三頁。
- (27) 富岡敬之、前掲論文、五四頁。
- (28) 富岡敬之、前掲論文、五五頁。
- (29) 徳富蘇峰（序）『思軒全集』巻一（堺屋石割書店、明治四〇年五月）六～七頁。
- (30) 川戸道昭「初期翻訳文学における思軒と二葉亭の位置」『森田思軒集』I（大空社、二〇〇二年一月）参照。
- (31) 森於菟「森田思軒の滞欧私信」『明治大正文学研究』季刊第二二号（東京堂、昭和三二年七月）一一六～一七頁。
- (32) 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（至文堂、昭和三六年八月）一五〇頁より引用。大隈重信にあてられたこの書簡の日付は、明治一八年一二月二八日。すなわち、思軒がロンドンに到着した七日後のことであった。
- (33) 磯辺弥一郎「森田文蔵氏逝く」『中外英字新聞研究録』（明治三〇年一月三〇日）。磯辺は明治九年二月に慶應義塾に入学するが一度退学（ないしは休学）して、明治一〇年一月に再入学しているところから、思軒と同校において顔を合わすことはなかったと思われる。「森



田文蔵氏逝く」の結末部分の全文章を掲げると以下のとおり。

《故吉田熹六と森田氏とは同窓の友にして、同じく報知社に於て矢野龍溪氏の幕下と為り、爾来、此二人は形影相伴なふが如く、一は俗才を以て、一は学才を以て *genius* の名ありし者。然るに吉田氏先づ夭折し、今又森田氏早世す。邦家の為に惜しみて尚ほ余まりあり。嗚呼、悲哉。》

磯辺弥一郎が発行した『中外英字新聞研究録』に関しては、拙著『磯辺弥一郎と「中外英字新聞」』（ナダ書房、一九九五年五月）参照。

(34) 矢野文雄は『郵便報知新聞』（明治一九年九月一六日）の一面すべてを使って同「改良意見書」を掲載している。

(35) 同「広告」に関しては、注（9）参照。

(36) 原抱一庵「王子村舎雑話」『少年園』第一二六号（明治二七年一月）七〜八頁。

(37) 原抱一庵、前掲文、八頁。

(38) 森田思軒「仏、曼ニ学士の譚」『郵便報知新聞』（明治二〇年三月二六日）。『ヴェルヌ集Ⅰ』明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》27（大空社、一九九六年六月）所収の同作品より引用。

(39) 森田思軒「翻訳の心得」『国民之友』第一〇号（明治二〇年一〇月）。『根岸派文学全集』明治文学全集26（筑摩書房、昭和五六年四月）所収の同文より引用。

(40) 原抱一庵「吾の昔」『文芸界』二巻一〜五、七号（明治三六年七〜十二月）。『根岸派文学全集』明治文学全集26（筑摩書房、昭和五六年四月）所収の同文より引用。

(41) 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』一六一〜六二頁。